

## 高齢者の夫婦関係と生きがいに関する研究

稲葉良子

### I 問題と目的

平均寿命の伸びに伴い、老年期が大幅に延長されている現代、この期間を心身ともに充実して生きるために「生きがい」の重要性が指摘されている。

「生きがい」という概念は様々に定義されてきているが、代表的なものとして神谷（1966）は、生きがいの源泉、または対象となるものをさす場合と、生きがいを感じている精神状態を意味する場合に分け、後者を「生きがい感」と呼んでいる。そしてこの「生きがい感」への欲求の構成要素として、生存充実感への欲求、自己実現への欲求、意味と価値への欲求などを挙げている。またフランクルの「意味への意志」という概念について、神谷は「生きがい感」はこの意味意識に近いとしている。

従来の研究では、老化プロセスへの適応を測定するために“subjective well-being”（主観的幸福感）という概念が考えられ、様々な尺度が開発されてきている。日本ではLawton（1972）のPGCモラルスケールを用いた研究が数多く行われてきており、その要因分析に関する蓄積がある。しかし、それらの研究では、PGCモラルスケールで測定される「主観的幸福感」を「生きがい」として操作的に定義しており、「生きがい」の本質的な側面を無視してしまっている。Ryff（1989）は、先行研究を批判して「主観的幸福感」の概念の再考を提唱し、従来の尺度は幸福感情に限定されていたとして、新たに人生の目的や方向性の重要性を述べている。この概念は、「生きがい感」と同じものを含んでいると言える。

一方「生きがい」には日本人特有の側面がある。塹江（1990）は木村（1972）の説から日本人の場合「人間関係」が「生きがい」の源泉であるとしている。「関係」に先立って「個」が存在する欧米人に比べ、日本人の場合はそれが逆であり、「関係」に規定され「個」の存在様式が決定される。自己の「人間関係」によって「生きがい」も規定されてくる。そのため高齢者の「生きがい」をとらえるためには、人間関係の相互依存といった側面を重視しなければならない。

以上のことを踏まえて本研究では「人間関係」と「生きがい」について調査する。高齢者の「人間関係」の中で、本研究では夫婦関係を取り上げる。現代は夫婦共に過ごす期間が長くなってきているためその重要性が指摘

されている。先行研究によると男性は女性がその夫から受けるより多くの援助を妻から受けており、配偶者に対する対人感情は男性より女性が低い（河合と下仲，1990）。定年退職後の夫婦の結婚満足度を調査した袖井・都築（1985）によると、夫の自由時間が増えると妻の満足感が低い。これらの研究から夫は家庭生活において身体的にも精神的にも妻に対して依存的になりやすく、このような夫の現実像の変化が妻の配偶者に対する肯定的感情に影響しているのではないかと考えられる。

本研究では、高齢夫婦の家庭における「役割」と情緒的な面での支え合いが、生きる目的や意味、価値といった「生きがい感」にどのように関連しているかを明らかにする。次のような仮説を検討する。①一方的に依存している人は「生きがい感」が低いだろう。しかし役割関係を肯定的にとらえている人は「生きがい感」は低くはないだろう。②「役割」で一方的に依存していても情緒的に相手を支えている人は「生きがい感」が高いだろう。③配偶者が「生きがい」を感じていると認知していて、そのような配偶者を役割上、または情緒的に支えている人は「生きがい感」は低くならないだろう。

### II 方法

調査対象は婦人会、生涯教育センター、福祉会館を利用している60歳以上の高齢者423名。うち353名を分析の対象とした（男性168名、女性185名）。平均年齢は70.3歳であった。調査は平成9年10月から11月に行い、対象者に質問紙を2部ずつ配布し、配偶者にも記入してもらい、1、2週間後に回収した。

調査内容は以下のようなものである。①役割についての調査項目は宮下・木田（1986）を参考に、家事、意志決定、付き合い、収入の4カテゴリーについて、自分がやっている「役割遂行」と配偶者がしている「役割依存」についてそれぞれ12項目の尺度を作成した（4件法）。②役割遂行、役割依存への情緒的反応についてはWalster et al.（1978）のMood Description Scaleを用いた（各13項目、2件法）。③情緒的依存関係については依存、被依存について袖井・都築（1985）の結婚満足度尺度、託摩（1997）の愛情尺度を参考に作成した（各10項目、2件法）。④被験者自身と配偶者の「生きがい感」についてはCrumbaughら（1969）のPILテスト

トを佐藤（1975）が訳したものを参考に作成した（各9項目、2件法）。

### Ⅲ 結果および考察

各尺度の信頼性係数を求めたところ、いずれも高い値を得た。

男女とも「生きがい感」は高かった。個人的属性との関連で分散分析を行ったところ、健康の主効果が認められた。また男性のみ配偶者の健康状態の主効果が有意であった。「役割依存」は男性が、「役割遂行」は女性が高かったことから、男性にとって依存対象である妻の健康が「生きがい感」に大きな影響を与えられ考えられる。あるいは、男性は自分より先に妻の健康が悪化するとは思っていない人が多いため、妻の健康悪化のインパクトが大きく、将来の不安と共に生きる張り合いが持たなくなってしまうのかもしれない。

「役割」への情緒的反応は有意な性差があり男性の方が満足感が高く、女性の方が不満足感が高かった。夫は役割関係に満足しているか不満に思っているかにかかわらず、役割を実際に遂行するかしないかが「生きがい感」と関連があり、一方的に依存している人は「生きがい感」が低かった。妻では役割やそれへの情緒的反応と「生きがい感」とは関連が見られなかった。本研究の役割は女性によってなされていることが多く、この世代の女性は特にそれを当然の仕事と考えている人が多いと思われるが、男性が家事などをする場合は自ら進んで楽しみながらやっている人が多いために「生きがい感」が高いのかもしれない。

一方、情緒的依存と被依存得点を合計した情緒的相互依存得点と「生きがい感」の相関は男性より女性の方が高かった。日本の女性は夫婦よりも母子の結び付きが強いと言われるが、子どもが独立した老年期の女性にとっては、情緒的に夫とどれだけ支え合っていけるかが生きる意味や喜びを感じるための重要な要因となっているの

だろう。一方男性は仕事に生きてきた人が多く、退職後健康ならば、それに変わる新しい仕事や趣味などに生きがいを求めたり、家庭外の居場所で他の人から承認され、生きる価値を感じようとする人が多いのかもしれない。

「役割」と「情緒的依存関係」との関係を見ると、男性では交互作用が認められ、一方的に役割を依存している夫は、情緒的に妻を支えていないと「生きがい感」が低いという結果となり、仮説が検証された。本研究の女性対象者は男性への依存の度合いが低かったため、女性では仮説が検証されなかったのかもしれない。

仮説③は男女とも検証されず、配偶者の生きがい感の認知に関らず、配偶者を支えているという意識はそれだけで「生きがい感」を高めていた。男女とも、配偶者が生きがいを感じているかより、配偶者との関係そのものが「生きがい感」に影響していた。

夫婦共に回答が得られたものについて、ペアの意識の「ずれ」を見たところ、役割の認知の「ずれ」は「生きがい感」と関連がないが、情緒的依存、被依存の「ずれ」はある方がないより有意に「生きがい感」が低かった。高齢夫婦にとって、役割への満足、不満はあるものの、情緒的に互いに支え合っていればそれなりに「生きがい感」が保たれると言える。

本研究では、比較的健康な高齢者を対象としているが、高齢夫婦にとって、どちらかの健康が害されるということは、最も深刻な問題である。そのような夫婦がどのように支え合うことができるのか、またそのような夫婦をどのように援助すべきかを考える必要がある。今後はそのような臨床群について調査しなければならない。また本研究の対象者は、社会的な場に出て他者と交流しようという人と考えられ、意欲的、積極的に生きる意味を見出そうとしている人が多いだろう。今後は、家庭内において、社会的場に出てこない高齢者を対象に調査する必要がある。